

# 宗岡二中だより 8・9月号



令和5年8月29日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

## 平和を構築する力

校長 伊藤大輔

夏休みを使って探究の芽を育ててみませんか？先月の学校だよりの最後にみなさんに伝えたメッセージです。与えられた時間を有効に使うことができたでしょうか？8月もあとわずか。本校も今日から新学期を開始します。夏季休業中のご家庭でのご協力・ご支援や地域の皆様の見守りに対し、改めて感謝申し上げます。授業、行事等を通じて一人一人が力を育み、力を発揮し、力を合わせて長丁場の2学期を創っていきましょう。

さて毎年8月は、テレビや新聞等で太平洋戦争に関する特集を目にすることが多くなります。広島、長崎の原爆の惨状、極限状態の戦場、空襲や学童疎開、戦後の暮らし等、当時の人々の様子や思いを知ること、改めて戦争や平和について考えるきっかけとなっています。戦後生まれの世代が大半を占める時代となり、また、戦争を体験した人たちの高齢化が進み、生の声で戦争の実情を知る機会がどんどん減ってきています。

私が小学校3年生の頃でした。今は亡き父が、軍用トラックのおもちゃを大事に抱える幼い男の子が写ったセピア色の焼け焦げた写真を私に見せました。それは戦中の幼い父を写した唯一の写真であること、当時は食糧難でひもじい思いをしたこと、機銃掃射の爆音におびえて震えながら一晩を過ごしたこと、戦争が激化し始めた4歳のときに大好きだった佐渡の海を離れ宮城県に疎開したことなどをぼつぼつと話しました。話好きな父でしたが、戦時下の体験は初めて聞きました。父は最後にしみじみと「平和な世の中になったなあ。」と言いました。平和のありがたみを噛みしめるように言いました。「へいわ」という言葉が、このときほど重く厚く響いたことはありません。

日本に住んでいると戦争やテロはどこか遠い存在のように思えるかもしれませんが、しかし、世界では現在もロシアによるウクライナ侵攻をはじめ、内戦やテロ行為、クーデター、ヘイトクライム、ジェノサイドと耳を塞ぎたくないような残虐な行為が行われています。ニュースの中の出来事は実際に起こっていて、子どもから大人まで非常に苦しい環境に置かれています。こうした卑劣な戦いは、いつの時代で

も泥沼化します。何万人もの犠牲者を出して、ようやく終わるものです。もっと平和に解決できる策があり、その方が幸せであることを誰もが知りながら、武力に頼ってしまうのです。どうしてでしょう？

詩人の谷川俊太郎さんは次のように書いておられます。「理由もなく、戦争をするのはいいことだ、どんどん戦争をしようと考えている人はいないと思う。でも、正しい理由があれば戦争をしてもいいと考えている人は多い。相手をやっつけなければ、こっちがやっつけられてしまうから、したくないけど戦争をしているというわけだ。ぼくら人間は大昔からそうやって戦争をしてきた。戦争はいやだ、戦争はしたくないと思いつつながら。どうしてだろう？それは人のこのころのなかに、平和がないからだと思ふ。平和をじぶんの外につくるものだと考えると、平和をめざして戦争をするということにもなる。じぶんのころを平和にするのはむずかしい。でも、まず始めにこう考えてみたらどうだろう？戦争はじぶんのこのころのなかから始まると。戦争をひとのせいにして、じぶんのせいだと考えてみる。ひとをにくんだり、さべつしたり、むりに言うことをきかせようしたり、じぶんのころに戦争につながる気持ちがないかどうか。じぶんの気持ちと戦争はかんけいがないと考えるかもしれないが、それでは戦争はなくなる。まずじぶんのこのころのなかで戦争をなくすこと、ぼくはそこから始めたいと思う。」(『おにいちゃん、死んじゃった』(教育画劇)あとがきより抜粋)

平和を希求する心は育てるものです。国と国との戦争に思いを巡らせることも大切です。と同時に身近な人とのいさかいを解決する手段を身に付けることこそ平和実現の第一歩なのです。人と人とが生きていく中であってトラブルはつきものです。トラブルが起こった時に、自分の気持ちや行動を思い返しながらか「誰が・何が・どうなってしまったか・その経緯の中で自分は何をしたのか」など、冷静に自分の心と対峙し、言葉によって解決できる力を自ら育ててほしいです。宗二中の皆さんが健やかに成長し、その笑顔が絶えることがないよう、世界にくまなく平和が訪れることを願わずにはいられません。戦後78年。今年の夏も父の墓前に手を合わせました。